

幼児の集団活動における創作玩具の機能について(その2)

○中島裕子 小笠原範子 島中徳子
(立教女学院短期大学乳幼児研究室) (立教女学院短期大学)

《研究目的》

昨年度に続き、2・3歳児の集団活動における創作玩具の機能について考察する。

《研究方法》

◎今回試作した玩具は、次の3種類である。

- ①マット 大2個(110×55×11^{cm})色:薄緑
中2個(55×55×11^{cm})色:薄緑
小4個(33×55×11^{cm})色:ピク、橙、薄緑、緑

②お手玉 マットと同色の小形のもの 約30個
他に少し大きめのもの 10数個

③四角の布 ハンカチ大 } のもの計40枚 大型2枚
スクーフ大 } (120×200^{cm})

試作した玩具はすべて布製であり、マットのカバーは取りはがし洗える。色は自然色を多く用い、材質はタオル地(マット、お手玉)、綿、木綿、レーヨン(布)などの感触の良いものを使用。

◎幼児の集団活動の方法

〈参加者〉子ども集団(13名、2・3歳児)、母親集団(2名)
指導者集団 6名(母と子各集団に分かれる)
観察記録者 2名

〈場所〉立教女学院短期大学 乳幼児研究室

〈期間〉58年4月～59年3月(週1回 90分) 計30回

ここでは9月から16回の活動を考察の対象とする。

〈活動状況〉活動は子ども集団と母親集団が別室に分かれて行なわれる。活動の始めと終りに母子合同活動がある。ここで使用した手づくりの玩具の他に他の一般的な遊具を併用している。子どもの特色は、前年度から集団活動に参加している子どももあり、集団の遊びの体験があり、これらの玩具が導入された段階ではすべての子どもが集団内での活動を充実させている。

《結果と考察》

◎分析の基準

物を媒介とした幼児の集団活動の発展段階を、Ⅰ自己及び自集団活動の展開する段階、Ⅱ自己及び自集団活動と他者及び他集団活動の分化が進む段階、Ⅲ自己及び自集団活動と他者及び他集団活動が交差し統合していく段階、の3つに分け、各段階を更に細かく分類する。また個々の発展段階に対応して、「活動の内容」、「指導のねらい」、「指導者の働きかけ」、「子どもの状況」とらえて分析したものが次頁の表である。

〈考察Ⅰ〉玩具の機能について、集団の各発展段階ごとに考察する。

Ⅰa: 遊ぶくり活動で、マットは構成的に、又お手玉は食物としてのみたてを誘い、子どもの自己領域での安定、充実を促進する。

Ⅰb: 「ダイナマンゴっこ」でマットがその素材的な弾力性、柔軟性を持つ為に子どもの身体的なエネルギーを吸収し、身体運動を誘い、子ども同志の楽しい共有体験を育てる。

Ⅱ: 指導者によってマットがドアにみたてられ(形態類似性、構築性)、それが開かれることで子どもに他者への認識を成立させる(領域化)。

Ⅲa①: マットによって新しく交通領域をつくることで、複数の下位集団活動の成果が目立つ。

Ⅲa②: 店屋活動で売り台としてのマットが新しい媒介領域をつくり、役割が分化する(領域性、役割性)。またマットがシャッターとして使われ(状況操作性)、さらに布が身につける売物として生活縮図的に使われる(素材性、日常生活性)。

Ⅲb①: 布が役割(読み手)や場面設定を明確化。同じく絵本を包む布が幕の効果をつくる。

Ⅲb②: マットとお手玉の色が対応することによって各下位集団活動が明確になり促進される(記号性、役割促進)。

Ⅲb③: 新しい素材としての布がパーティー場面を明確にし、下位集団活動で多様にみたてられた物を凝集し、目立たせ(舞台性)、共有媒介性、役割行為誘発性を促進する。

Ⅲb④: 「ダイナマンゴっこ」でやられても回復できるお手玉の葉が子どもによって集団全体に伝わることで交通のルールとなり、役割行為も多様化する。

〈考察Ⅱ〉以上3種類の玩具(マット、四角い布、お手玉)は、2・3歳児の集団活動の発展を促進し、特に指導者の働きかけによって有効に機能する。またそれらの組み合わせにより、更に多様な機能を発揮し遊びの幅を広げる。布は、子どもの日常生活において身近な素材であり、遊びに取り入れられやすく、自然色を用いることで、多様なみたてが誘われる。

(参考文献)

・玩具文化研究所「玩具文化」No1～No3

・関係学研究編集委員会「関係学研究」第1巻～第11巻

L:指導者

集団の発展段階	活動の内容	指導のねらい	指導者の働きかけ	子どもの状況(自己・人・物との関係)
I) 自己・自集団活動の展開	a. 自己・物との関係	○マットを使って家づくりをする。	○子どもの遊びを見つけ、安定、充実する。	○子どもの自発的な活動を見守る。
	b. 自己・人・物との関係	○ダイナマンになってしが持つマットに向かって攻撃する。	○物をみたくて演者の的にふるまう体験をする。	○子どもの動きに対応させ、しが物を操作し活動を促進する。
II) 自己・他集団活動の分化	他者・他集団活動の意識化、一方的働きかけ	○家(3面が壁、屋根が布)から外をながめ、他のコーナーを見つけ、行く。	○新しい物を自分なりに使ってみる、試してみよう。	○新しい性質の領域を用意し、活動の幅を広げるきっかけをつくる。
	a①. 他者・他集団領域との共通領域活動成立	○花畑(マット)に各コーナー活動の成果(折り紙の花)を飾りに行く。	○周辺にいる子どもも、物媒介に集団に位置づく。	○各コーナーの自己活動が位置づくように共通領域をつくる。
III) 自己・自集団活動、他者・他集団活動の交流	a②. 他者・他集団活動、自己・自集団活動の交流	○他の子どもの動かす電車を山(マット)で阻止するが、その後協力して電車を山越えさせる。 ○店や活動・売り台(マット) ○売り物 エプロン、スカーフ、ハンカチ ○閉店のシャッター(マット)	○物媒介に様々なつもりがお会って生かされ、より豊かな共通体験をする。 ○簡単な役割をとり、物を多様にみたくて集団の活動に生かして使う。	○対立的な場面や、両者に共通な場面を設定し、共通活動をやさそう。 ○子どもの多様なみたくを演者の補助、補助的に促進する。 ○媒介領域(売り台)を設定する。
	b①. 課題による合同活動の展開	○絵本をみる活動・読み手の席に布を目印・布で絵本をくるみ、絵本を焦点化する。	○提供された課題に興味をもち、課題活動を楽しむ。	○布を使って演出して働きかけ、視覚的な新しさをさそう。
	b②. し媒介による自己・自集団活動の全体集団活動化	○家さがし活動 ①曲にのって歩く(散歩) ②曲が止まったら、好きなキャンディー(お牛玉)を取り、その色と対応する家(マット)を探し求める。 ③全体で各領域の確認「へのお家の人？」	○複数の色で分けられた領域の中から、物(お牛玉の色)媒介に自集団を選択する。その集団に属しほかの全体集団活動を楽しむ。	○演者の物(お牛玉)とマットの色の対応を媒介にした下他集団構成を促進する。 ○全体の中で、各グループの特徴を明確にし、自集団・他集団の意識を育てる。
	b③. Lによる下位集団相互発展/全体集団活動化	○パーティー活動・各コーナーでみたくて使った/食物を、中央のテーブル(マット)に持ち寄り首で楽しむ。	○各コーナー活動で食物にみたくて物を全体で共有して集団活動を楽しむ。	○新しい物(レスのテブルクロス)を目立たせて、状況操作し、雰囲気盛り上げ、活動を促進する。
	b④. 子ども主導による集団活動展開化	○ダイナマンゴっこ・活動の過程でルールがつくられ、お牛玉が「生き返る薬」、「元気になる薬」にみたくてられ、薬を必要とする人に渡す、つけてあげる。	○対立場面において物媒介に「やられる」ことも発展的にとらえられ、集団活動として楽しむ体験ができる。	○対立しやすい場面において、先への活動を予測しほか、遊びが転換しやすくなるような働きかけをする。 「薬はありますか」
				○子ども状況(自己・人・物との関係) ○細かくつもりをもって物をみたくて家を構成する。 ○興味ある役割をとって、物を媒介にエネルギーに生き生きふるまう。 ○囲まれた領域の窓的部分から外をながめ、他集団活動に気づき参加したくなる。 ○制作した花を飾りに行き、他の人の飾った花を見て、もっと作りたくなる。 ○人を拒む物としてみたくた物を、共通の成果を楽しむ物として意識し、人との共通活動を楽しむ。 ○シャッターで状況操作(閉店)をする。 ○日常生活的な役割行為をとる。 ○物(美しい布)により、役割分化ができ、絵本活動を楽しむ(読み手の席、聞き手の席)。 ○マットとお牛玉の色の対応を楽しんだり、先で属することによる集団を意識しほかからお牛玉の色を選ぶ。 ○物の色をとらえ、みたく楽しむ。 ○全体の中で、グループの1人としてふるまえる。 ○自分のみたくてた物が全体活動の中で生かされ、共有されること(うれしい)。 ○簡単な役割行為を楽しむ(歌う、手拍子と打つ) ○みたくてた物の機能(ルール)を人と共有しほかから、やる「やられる」場面を演者の転換しやすくなるようにくり返し楽しむ。 ○多様なふるまひ方ができる。(やられ方、薬の使い方、処置のされ方)